

●ドイツの笑える昔話

最近、「愚か村」という日本のお話を聞きました。そのとき私が思い出したのは、「シルダの住民」というドイツのお話です。今回は、これがどんなお話か、皆さんにちよつとご紹介します。

町役場の建設

あるところに、シルダという町がありました。シルダの住民は、ある時新しく立派な町役場を建てようと考えました。しかし、窓の設計を忘れてしまい、町役場の中は真っ暗でした。彼らが思いついた解決策は、なんとバケツに太陽の光を入れて中に持つていくことでした。もちろん、光は持ち運べませんでした。そこで「邪魔な」屋根を取り払ってしまったのです！夏はなんとかなったようですが、冬はとても寒かったそうです。

木材の運び入れ

シルダの住民はまたあるとき、木を切り倒し、その幹を木材として町に運び入れたいと思いました。しかし、門が狭すぎてつかえてしまい、入りませんでした。彼らは木材を町の城壁と並行に通そうとしていたからです！結局彼らは門の左右を木の幹の長さに合わせて壊しました。そして、すべての木材を町に入れた後になってよう



やく、木材を縦にして通せばずつと簡単だったことに気づき、木材を再び運び出して壁を作り直したのです。



塩の畑

塩はとても高価だったので、シルダの住民は自分たちで塩を「作ろう」としました。そのため彼らは畑に「ただの塩」を種としてまきました。もちろん塩が植物のように育つはずはありません！結局塩は収穫できませんでした。この話は、「塩山」という名前で知られています。



沈んだ鐘

大きな戦争の知らせがドイツ中に広がっていた頃です。シルダの住民は、町役場の美しい鐘が盗まれたり壊されたりしないか心配になりました。そこで、彼らは戦争が終わるまで鐘を湖の底に隠すことにしたのです。

住民たちは船に乗り込み、湖の上へと漕ぎ出しました。いよいよ鐘を沈めるとき、彼らはふと「後でどうやって沈めた場所を見つければいいのだろうか？」と思いました。彼らが悩んでいると、町長が「いい案があるぞ！」と言い、ナイフを手に取り、船の底に目印を刻んだのです。そして、「この目印があれば、鐘を見つかることができるよ」と言いました。シルダの住民は安心し、鐘を湖の底に隠すと、そのまま船でゆうゆうと帰ったのです。

戦争が終わると、シルダの住民は鐘を回収するために、湖へと出かけました。しかし、目印は彼らと一緒に移動する船の底にあるのです！鐘がどこにあるのかは、誰にもわからなくなってしまうようになってしまったのです。

さて、このお話を読んで、皆さんはなにを思いましたか？ぜひ教えてくださいね！

第3回ティーパーティー開催のお知らせ

下野市国際交流協会の交流会として第3回ティーパーティーを開催します。

今回は縁日をテーマとして、綿あめづくり・コマ・竹とんぼ・けん玉などの日本昔遊びを企画しています。

また、当日は日本語教室を受講している外国人の方も招待する予定です。一緒に楽しみましょう！皆さまお誘いあわせのうえ、ぜひお越しください。

■日時

7月16日(日) 午後1時～

■場所

市民農園 クラブハウス

■定員 20名

■参加費

会員 300円

一般 500円

※当日集金します。

■申込期間

7月10日(月)～14日(金)

■申し込み・問い合わせ先

下野市国際交流協会事務局

(市民協働推進課内)

☎(32)88867

■人口と世帯(6月1日現在)

人口/60,266人(+42)、男性/29,908人(+34)、女性/30,358人(+8)、世帯数/23,530世帯(+51)

TAKE FREE

広報しもつけを設置協力いただけるコンビニエンスストアを募集しています。ご協力いただける場合は総合政策課☎0285(32)8886情報広報グループまでご連絡ください。

PC・スマホ市ホームページ

